

スペイン及びオランダの台湾植民地支配

堀江 洋文

はじめに

台湾島はフォルモサ（美麗島）とも呼ばれ、1544年に島を見たポルトガル人船員がフォルモサ（麗しの島）と叫んだことからこの名があると伝えられている。16世紀から17世紀初頭にかけてのポルトガルは、東アフリカから日本の長崎に至るポルトガルの海上帝国の中心として「旧ゴア」を持っていたが、この本拠地は17世紀初めには「黄金のゴア」と呼ばれるまでに発展している。さらにポルトガルは、1511年にインド総督アフォンソ・デ・アルブケルケが征服し、その後フランシスコ・ザビエルも東アジア宣教に出発した要所マラッカをおさえ、東南アジアから東アジアに及ぶ地域の交易や植民における強力なプレイヤーとして君臨した。1580年以降60年間にわたってこのポルトガルを併合し、イベリア半島のみならず、ヨーロッパにおいて絶大な権勢を誇ったスペインも、マニラを拠点に周辺地域への影響力の拡大に向けて虎視眈々とその機をうかがっていた。1626年、スペインが現在の台湾基隆市の和平島にサン・サルバドル城を建設し、さらに淡水に土と竹と木のみで造られたサン・ドミンゴ城を構えたのは、台湾北部の領有というよりは、台湾南部に拠点を築きつつあったオランダへの対抗と、日本を含めた東アジア交易網の確保、そして何より今日のジャカルタ北部に位置するバタヴィアを中心に勢力圏を拡大しつつあったオランダから、スペインが本拠を置くフィリピンのマニラを防御する助けとなると考えられたからである。オランダが台湾南部を支配下に置き、バタヴィアと一緒にマニラを南北から挟み撃ちにするように攻め入る脅威を、マニラのスペイン人は感じていたはずである。

ヨーロッパでの対立構造がそのまま東アジアの植民地化、交易関係に持ちこまれた形であるが、本稿では、このような欧州列強の南シナ海周辺地域への関与と植民のなかで、どのような経緯でスペインやオランダによる台湾領有と交易支配が実現していったかを解説する。マラッカを挟んで西にベンガル湾、インド洋という大海が位置し、東には南シナ海という内海が存在したが、ムスリム交易商を中心としたインド洋商業圏にも劣らない活発な経済活動が、マラッカ海峡の東側でも展開されていたことが、西欧と台湾の接触の原点となっている。これまで『海洋史』のコンテキストで、インド洋に関してはチャウドゥリ（Kirti Narayan Chaudhuri）が、ベンガル湾に関しては、ビッグ・ヒストリーに流されることなくやや抑制的であるが、ベンガル湾北部の河畔地域も含めたベンガル湾海洋史を描写するリラ・ムカージー（Rila Mukherjee）

の研究が著名である¹⁾。明代の海禁政策によって交易や交流に制約があった東シナ海や南シナ海には、上記の海洋史に類する概念はないが、密貿易が横行する中、ポルトガル、スペイン、オランダを巻き込んだこの海域および周辺地域における植民、交易活動は十分に精査に値する。

1. 欧州列強の東アジア進出と台湾

1602年にオランダのいくつかの貿易会社が統合され「オランダ連合東インド会社」(Vereenigde Oostindische Compagnie、略称 VOC) が設立され、インドから東南アジア、東インドに至る広範囲な地域で貿易の独占権だけでなく、要塞の構築と兵士の駐屯、敵対勢力との交戦権等幅広い権限がこの会社には与えられた。この会社は軍事色の強い国策会社であり、それ以上に国家のような強力な軍事的権限が与えられていた。オランダ東インド会社は、1619年にジャカルタを占領しバタヴィアと改称して要塞化し、ここをアジア交易の拠点として発展させるが、バタヴィアの東インド会社は世界でもやや異質な組織集団であったと言われる。一部の例外はあるがオランダ・カルヴァン派の影響は総じてあまり強くなく、オランダ語よりポルトガル語を好んで話す者もいた。会社にはオランダの名門家族の厄介者や破産者、ヨーロッパ北部の港ではやくざ者扱いされた者達で溢れていた。カトリック諸国の船舶を拿捕し、カトリック教会を襲撃したウォーターフーゼン(海の乞食団、ドイツ語のヴァッサーゴイセン)の雰囲気醸し出す組織体であった。一方で、17世紀では最も近代的でユニヴァーサルな組織体でもあった。オランダ東インド会社が、株式会社の起源とされる企業形態であるジョイント・ストック・カンパニーであったこともその1つである。オランダ東インド会社は、ヨーロッパへの供給で独占的地位を築けて交易利益の大きい商品に関心が高く、その代表的産物として香辛料に注目し独占的交易を拡大させていった。その他に、徐々にオランダによって植民地化されていったジャワ島では、東インド会社は砂糖キビにも関心を示し、その過程でバタヴィア周辺には華人が多く招き入れられ、彼等を砂糖キビ栽培等の農業生産に従事させている²⁾。この状況は、この後に言及するオランダの台湾植民地支配でも顕著に見られる光景で、農業生産高の飛躍的増大とともにオランダ東インド会社に多大な利益をもたらした。オランダは、1623年に勃発したアンボイナ事件の結果イギリスを駆逐し、香辛料の産地であったモルッカ諸島の交易支配権を確立した。即ち、この事件後、東南アジアへの進出を諦めインドへの植民地進出に注力

¹⁾ Kirti N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750* (Cambridge, 1985); Rila Mukherjee, *Merchants and Companies in Bengal* (New Delhi, 2006) 及び *Strange Riches: Bengal in the Mercantile Map of South Asia* (New Delhi, 2006).

²⁾ John E. Wills Jr, *Pepper, Guns and Parleys: The Dutch East India Company and China 1622-1681* (Cambridge, Massachusetts, 1974), pp. 19-20.

するようになるイギリス東インド会社を尻目に、オランダは東南アジアの諸島で支配的地位を築くようになる。一方、スペインが支配するフィリピンは、太平洋を挟んでヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコ）と細い線で結ばれた東アジアの孤島のようにあり、ヨーロッパにおいてもその権勢に陰りの見え始めた 17 世紀のスペイン・ハプスブルク家にとっては、黄金時代と言われた 16 世紀の軍事力をアジアにおいて誇示することは、もはや不可能であったと思われる。このような状況下、当時明朝を含め、どの列強も支配を確立していなかった台湾に、オランダやスペインが関心を寄せるのは自然な動きであった。当時重要な交易先であった日本との交易ルートの中に位置し、大陸にも近い地理的条件を考えれば、本来であれば各国が台湾に食指を動かすようになっていても不思議ではない。

オランダの台湾進出は、ポルトガルの中国及び日本との交易の拠点であったマカオを 1622 年に占拠しようとしたが、アフリカ人奴隷兵士を擁するポルトガルの反撃に会って失敗したことに端を発する。その後オランダは澎湖諸島の占拠を試みるが、これも明の反撃で駆逐され実現に至らず、結局当時明の支配の及ばない台湾に拠点を設けるべく、現在の台南付近に侵攻した次第である。しかし、16 世紀から 17 世紀にかけて、台湾のみならず、西欧諸国がアジアの諸地域を植民地化していくことができた背景に何があったのか、歴史上の大きな疑問である。ヨーロッパ人による新世界の征服や、産業革命後の帝国主義的植民地支配は、ヨーロッパとその他の地域との技術力ギャップの存在によってある程度の説明が可能であるが、本稿のテーマである 17 世紀初頭の台湾に関しては、納得のいく解説を提示することは難しい。明朝のみならず、日本さえもこの「麗しの島」に食指を動かすことは十分に考えられた。実際、明朝の冊封を受け入れていた琉球王国は 1609 年に薩摩藩の侵攻を受け、属国となってその実効支配下に入っていた。確かに琉球王国は、そのような状況下でも対外的には独立国の体裁を保ち続け、中継貿易で大きな役割を演じつつその交易はマラッカまで及んだ。薩摩藩の支配は、実際には琉球支配で手一杯であったが、外部世界から見れば、薩摩の影響が隣の台湾までも及ぶ可能性も危惧されていた。このように台湾を取り巻く強国が存在する中で、17 世紀の一時期ではあるが、オランダやスペインの支配が台湾に及んだ理由はどこにあるのか吟味する必要がある。

アジアの強国たる明・清朝や日本ではなく、オランダを含めヨーロッパ諸国がアジアにおいて植民地形成に成功したのは、しばしば言われているような科学技術、軍事技術、経済組織において後者が前者を上回っていたからではなく、国家の支援という政治的優位があったからで、ヨーロッパ諸国は海外植民地を支援する体制をきっちり整えていたからである。それに対し、アジアの主要国にはそのような支援体制がなく、幸運も重なり、台湾を含むアジア地域でオラ

ンダ等ヨーロッパ勢の植民地進出を許すこととなる³⁾。1624年、オランダ東インド会社は台湾の安平（今日の台南市の一部）に前哨基地要塞を建設、ゼーランディア砦（Fort Zeelandia）と名付けた。今日では、この砦跡は安平古堡と呼ばれ台南市の観光地の一つとなっている。本来はポルトガルがマカオを通じて行っていたように、中国の絹を日本の銀と取引する目的で造られた植民地であったが、オランダは台湾の地に大きな経済的可能性があることを発見する。即ち、獣皮（特に鹿革）、鹿肉、砂糖、米の取引は東インド会社に大きな利益をもたらす可能性があった。問題は狩猟や農業生産に携わる人をいかに確保するかの問題であった。土着のアウストロネシア系原住民族の首刈り族は、家族を養うための穀物生産を超える量の市場用穀物生産には全く興味を示さず、逆に入植者への妨害行為が頻繁に起こり、オランダが信頼して生産を任せられる存在ではなかった。そこで白羽の矢が立ったのが、台湾海峡を挟んだ福建に住む貧しいながらも勤勉な中国人（漢人）である。オランダ東インド会社は、募集に応じた者たちに台湾での土地の提供を保証するとともに、4年間の納税免除、砂糖と米の買い取りの約束といういくつかの好条件を提示していた。募集に応じて台湾南西部に移り住んだ福建人は、総計1万5千人に上ったと言われる。その意味で台湾（少なくとも南西部）は、「オランダ統治下の中国人植民地域」と見なすことができよう。ゼーランディアを中心としたオランダ統治地域は、中国人の農夫や労働者無しでは繁栄はおぼつかなかったと思われるし、一方中国人移住者もオランダの保護がなければ、期待される収益を上げることは不可能であった⁴⁾。

台湾は福建人にとって多くの点でフロンティアであった。土地は肥沃で水利も悪くなく、米や砂糖キビの栽培には適しており、危険を伴うとはいえ、福建から小型のジャンクでも到達可能な距離にあった。ただ一つの障害は、首刈りを習慣とするアウストロネシア系原住民の存在であった。原住民には多様な部族があり、彼らは普段はライバル部族の集落を襲うが、中国人移住者に攻撃を仕掛けることもあった。そこで、オランダ東インド会社にとって台湾への大規模な移住を実現させるためには、強力な軍隊と組織の統制が必要であった。さらに、オランダがこのような植民政策を展開できたのは、当時台湾には力の空白があったからである。東アジアの強国は海外で植民地を維持することに関心が薄く、中国のように明朝、清朝に領土拡張を果たした国でも、それは陸地における拡張であり、ヨーロッパ列強のごとく海を越えての勢力拡大ではなかった。鄭和の大遠征は明代においてはあくまでも例外的事例であり、明朝全体で見れば、陸にしがみつき海に出ることを躊躇し且つ抑制する時代が続いたと言って過言ではない。宦官鄭和の遠征は、モンゴル帝国によって陸路（即ち今日的には一帯）が抑えられていた

³⁾ John E. Wills Jr., 'Maritime Asia, 1500-1800: The Interactive Emergence of European Domination', *American Historical Review*, vol. 98 (February, 1993), pp. 83-105.

⁴⁾ Tonio Andrade, 'The Rise and Fall of Dutch Taiwan, 1624-1662: Cooperative Colonization and the Statist Model of European Expansion', *Journal of World History*, vol. 17, no. 4, pp. 429-31.

ために取られた窮余の策ではあったが、一時はアラビア半島やアフリカ東海岸にまで到達し、合計 7 度にわたる大遠征であった。15 世紀初めに行われたこのような鄭和の外洋航海は、東南アジアを超えてインド洋、ペルシャ湾、アフリカ東海岸に及んだのであるが、元、明代には東洋と西洋がマラッカ海峡を境に区切られていたために、「下西洋」（即ち西洋下り）と呼ばれていた⁵⁾。海禁（下海通蕃の禁）政策は、そのような明代の海外遠征に対する抑制姿勢を代表する動きである。鄭和の遠征は国庫に大きな負担を強いることになったため、そのような大規模海外遠征抑止に明朝が舵を切ることはごく自然な成り行きであった。莫大な出費を伴う下西洋ができないほどに明の国家財政は逼迫しており、鄭和時代の記憶を封印したいとの思いは宮廷周辺で強かった⁶⁾。また、北辺での緊張が続きそちらに兵力を割くことは、中国南東沿岸部における海軍力の低下を意味した。

そのような状況下、16 世紀に中国人密貿易商と結んで東アジアの沿岸地域で活躍した後倭寇は（その構成員の大部分は中国人であった）有名であるが、倭寇は海禁政策により私貿易が制限されたことに強く反発した。海上交通や貿易、漁業等が規制され、同時に沿岸部の治安維持及び密貿易の取締りが行われて、朝貢体制を側面から補強するのが海禁政策の本来の目的であった。海外貿易は国家間の朝貢貿易だけに限定されたことで、密貿易の取締りがそのまま朝貢制度の維持に直結した⁷⁾。しかし、私的な海外交易が完全に排除されたわけではなく、広州等ではある程度の外国との繋がりには許容されていたようである。実際 1567 年に明は、海禁を若干緩和し朱印状のような免許制度を始めるが、その影響もあり海賊行為は減少の道をたどっている⁸⁾。しかし、明朝全体から見ると、外国とのつながりは制限され、鄭和の航海に対する反動も見られた。1603 年、マニラにおいて 2 万人とも言われる中国人居留民が殺害された時も、明朝政府は外国へ渡航した自国民に対する対応を行わず、殺害に対して抗議を行うことも特にな

⁵⁾ 今日鄭和の大遠征は、習近平中国国家主席が唱える一帯一路の一路を想起させ、「真珠の首飾り」と称する南シナ海からインド洋、東アフリカ沿岸部に及ぶ中国の海上交通戦略として、国家安全保障の見地から議論される時もある。実際鄭和像は、故郷の雲南省昆陽の他に、マラッカや中国の援助で建設されたケニア高速鉄道のモンバサ駅に建立され、さらにマラッカには鄭和文化館が設立されている。しかし、イスラム教徒として生まれた鄭和にとってこの大遠征は、習近平が唱える「中華民族の偉大な復興」の野望と絡めて理解されるよりは、（多少の威嚇はあったが）イスラム文化と中国文化の交流の具現化を意味していたのではないかと思わせる節もある。第 5 回の遠征では、モンバサの北に位置するマリンディに到達しているが、この町ではかつてムスリム商人がインド洋を中心に活発な経済活動を行っていた。その意味で、鄭和の遠征によって、インド以東のこれまでの中国商人の活動範囲を超えてムスリムの交易圏まで踏み入ろうとする経済的動機づけが中国側にあった可能性はある。また宗教的に見ても、イスラム教徒であった鄭和の分隊が第 7 回遠征においてはメッカに到達していることは特記に値する。この問題についての詳細は、松本ますみ「一帯一路構想の中の鄭和言説：中華民族の英雄か、回族の英雄か」『国立民族学博物館調査報告』142 巻、31-54 頁を参照。

⁶⁾ 寺田隆信『中国の大航海者 鄭和』清水書院、1984 年

⁷⁾ 壇上寛「明代海禁概念の成立とその背景―遼禁下海から下海通番へ」『東洋史研究』第 63 巻 3 号（2004 年）、421-2 頁。

⁸⁾ Tonio Andrade & Xing Hang, 'The East Asian Maritime Realm in Global History, 1500-1700', *Sea Rovers, Silver, and Samurai* (Honolulu, 2016), p. 8.



和平島から見た基隆港入口付近。左端にサン・サルバドル城を模した建造物が見える

かった。一方日本では、戦国時代に収入を求めて海外交易に打って出た大名も存在したし、マニラ、ベトナム、カンボジア、タイには日本人社会もできるほど海外との関係が密接に形成される時代であった。戦国時代が終わっても、朱印状による海外交易の認可と保護のもとで交易は継続された。1609年には薩摩の島津藩は琉球王国の領土であった奄美大島、続いて沖縄本島に攻め入り首里城を攻略する。それまで明の冊封国であった琉球は、以後薩摩の従属国になる一方、明に代わって中国大陆を支配した清に朝貢を続ける。薩摩が沖縄まで勢力拡大をしたことは、実際にはそれだけの実力はなかったにせよ、台湾北部への日本の勢力拡大の可能性を示唆した。16世紀末に李氏朝鮮の征服を試みた文禄・慶長の役からまだそれほど時間が経っていない頃である。マニラに本拠を置くスペインが1626年に台湾北部の基隆港の入り口に位置する和平島にサン・サルバドル城を築城し、さらに1628年には同じく台湾北部海岸の淡水にサン・ドミンゴ城を築城したのも、日本への交易路の確保やオランダとのライバル関係の他に、薩摩の上記のような動きを察知しての行動であったとは考えられないであろうか。和平島と淡水は、オランダに駆逐されるまでスペインにとっては、商業及び軍事活動の中心となっていく。徳川時代を迎え、中国・オランダなど外国船の入港を長崎のみに限定し、東南アジア方面への日本人の渡航及び日本人の帰国を禁じた1635年の第3次鎖国令が發布されると、自由な海洋進出は禁止されることになる。明と日本という東アジア最大の勢力が自国に閉じこもる幸運に恵まれて、オランダ東インド会社はバタヴィアの拠点を中心に、台湾の植民統治と交易の利益を享受することができたのである。もしオランダ東インド会社がオランダ政府から受けたのと同

じような支援を日本の交易従事者が徳川幕府から受けていれば、オランダを駆逐して日本の台湾制覇が可能であったかもしれない。オランダ東インド会社は、名目上は会社であるが、実際は通商上も軍事的にも国家の支援を受けた強力な組織体であり、本来は海外においてスペイン、ポルトガルに対抗する目的で設立された⁹⁾。

バタヴィアに拠点を置くオランダ東インド会社の勢いが頂点に達したのは 1680 年代後半であったが、17 世紀を通じてオランダはアジアの各地域間交易で大きな利益を得ていた。彼等の交易の基礎にあったのは日本の金銀塊であり、それをもとに中国やインドの繊維の売買が行われていた。1690 年以降になると、インドに支配を拡げるイギリスが中国沿岸に出没して、当初はそれ程大きな品目ではなかったお茶や阿片の市場が形成され始める。本稿で問題とするのは、そのような時代に至る前の 17 世紀初めから半ばにかけてのオランダ東インド会社の活動で、台湾への植民と支配がどのような周りの国際的秩序のなかで進められていったのかを考察する。そのオランダが、海洋交易の交差点とも称されるバタヴィアを本拠地と定めたのは偶然ではなかった。彼等は、バタヴィアを中心としてインド洋と南シナ海の船舶の動きを調整し、インド亜大陸とインドネシア諸島間の航路を独占することに成功した。オランダ船は、インドとインドネシアに設置された在外商館を行き来していたのであるが、オランダは明・清朝によって中国沿岸部の港への出入りが禁止され、対中国交易については、海禁政策の不備を突いてインドネシア諸島と密貿易を行う中国人船舶に実質物資輸送を頼ることになる。禁を破った中国人商人達は、南シナ海を取り囲む地域で交易活動が続け、明朝による密貿易撲滅の努力にもかかわらず、明代中期以後は、日本からインドネシア諸島に至る密貿易ネットワークが形成されることとなる。そして、海禁政策の適用が厳格になればなるほど、海賊行為や密貿易の増加が見られたことは言うまでもない。その後海禁が若干緩和されると、毎年免許を更新することで船主は東南アジアとの交易を行うことが許され、16 世紀後半には厦門近くの九竜江デルタにある月港 (Yuegang、後の Haicheng 海澄) がこのような密貿易商にとっての隠れ家且つ海洋交易ネットワークの中心となった¹⁰⁾。

中国から南シナ海の沿岸地域をたどる交易ルートは、南シナ海の西側と東側を通る 2 つのルートがあり、西側は厦門から、チャンパ (現在のベトナム中部沿岸部)、カンボジア、シャム、マレー半島、スマトラ島、ジャワ島北部海岸、チモールを通過してモルッカ諸島 (香料諸島 Spice Islands と称された) に繋がるものであった。東側のコースは、厦門から澎湖諸島 (現在の台湾澎湖県)、フィリピンのルソン島からモルッカ諸島に至るルートであり、トルデシリャス条約

⁹⁾ Andrade, 'The Rise and Fall of Dutch Taiwan, 1624-1662', pp. 431-3.

¹⁰⁾ Leonard Blussé, 'No Boats to China. The Dutch East India Company and the Changing Pattern of the China Sea Trade, 1635-1690', *Modern Asian Studies*, vol. 30, no. 1 (Feb., 1996), pp. 51-8.

に続いて西葡間で締結されたサラゴサ条約で取決められた子午線の西側のポルトガル優先地域に位置するが、このサラゴサ条約でフィリピンスペイン領有が認められている。ポルトガルとスペインは、香辛料をめぐるモルッカ諸島の領有を争ったが、南シナ海の周辺は両国にオランダを加えた当時のヨーロッパ列強の抗争地域となった。その範囲は、今日中国が九段線として自国海域として主張する範囲を大きく超える地域及び海域を占めている。ポルトガルは16世紀初頭に西側ルートの外側に位置するマラッカ海峡に定着して、インド洋から東シナ海に至る幹線を支配し、1557年にはマカオに交易基地を設立している。ポルトガルは、これら2つの海域の間を通行する船舶から通行料を徴収している。一方スペインは、支配下にあるヌエバ・エスパーニャからの銀塊を資金源に東側ルートに深く関与し、1571年にはマニラにアジアにおける拠点を設置する。太平洋を超えてのスペインのマニラ進出は、歴史上初めてアメリカとアジアが繋がった瞬間を意味する。既に1565年にはバスク人アンドレス・デ・ウルダネータ(Andrés de Urdaneta)によってマニラ・ガレオン貿易が創始されている。このガレオン船は、以後19世紀初頭までマニラとアカプルコ間を行き来する。マニラは1590年代には数千の中国人、数百を数える日本人やほぼ同数のスペイン人を集めて、いわばアジアにおけるEuro-Asian co-colonialism とでも呼べるハイブリッド(混成)植民の様相を呈していたと言えよう。そこでは軍事、経済、技術において西洋の圧倒的優位は明白ではなく、ヨーロッパと中国人交易商の間では共通の経済的動機が支配していた¹¹⁾。そのようなハイブリッドな植民政策を垣間見ることができたのが、オランダが拠点化を試みた台湾であった。

オランダがこの地域に関与し始めた頃、ポルトガル、スペイン、そして密貿易を中心とした中国人による交易は活発に行われており、オランダ東インド会社はマラッカに拠点を持つポルトガルとは距離を置いて、南シナ海、ジャワ海とインド洋を結ぶスンダ海峡の制圧に動き、バタヴィアを建設して香料諸島との交易路の確保を目指した¹²⁾。オランダ東インド会社は、西側ルートでタイ(サヤーム)南部のマレー半島に位置するソクラーやパッターニー、さらにはタイのアユタヤに商館を建設し、試行錯誤を繰り返しながら当地の交易活動に従事していく。

¹¹⁾ Birgit Tremml-Werner, 'Friend or Foe? Intercultural Diplomacy between Momoyama Japan and the Spanish Philippines in the 1590s' in *Sea Rovers, Silver, and Samurai*, p.69.

¹²⁾ ユネスコの世界記憶遺産になっているオランダ東インド会社記録文書(VOC Archieven)は、現在デンハーグのオランダ国立文書館(Het Nationaal Archief)に保管されており、1602年から1811年に及ぶアジアにおける同会社の交易活動のみならず、競争相手国に関する情報も豊富に提供している。この中で台湾に関する記述は、Cheng Shaogang, 'De VOC en Formosa 1624-1662: een vergeten geschiedenis' Ph.D. diss., Rijksuniversiteit te Leiden, 1995にまとめられている。この他にオランダの台湾植民地政策に関する記録としては、『ゼーランドシア城日誌(De dagregisters van het Kasteel Zeelandia)』と『バタヴィア城日誌(Dagh-register gehouden int Casteel Batavia vant passerende daer ter plaetse als over geheel Nederlandts-India)』がある。前者には、江樹生の評註による中訳本『熱蘭遮城日誌』台南市政府発行がある。『熱蘭遮城日誌』にはDe dagregistersにおけるfolioの番号まで記載があるため照合は簡単にできる。これらオランダ側史料と、『明実録』『台湾外記』『明清史料』等の漢文文献の情報を繋ぎ合わせていくと、当時の状況がほぼ再現できる。

さらにオランダは、中国広東や福建でも足場を築こうとたびたび試みたが、1624年にはそのようなチャレンジが失敗に終わることとなる。そこで同会社が注目したのが、台湾南西部、今日の台南にあった砂嘴であり、そこに彼等は営舎（後にゼーランディア砦と称された要塞）を建設する。この砂嘴はこれまで中国や日本の密輸者達が取引に使っていたところで、明朝の管轄地の外に位置していた¹³⁾。

2. 台湾におけるオランダ東インド会社の植民・交易政策

オランダが台南の砂嘴に営舎を築き始めた2年後、上記のようにスペインも基隆港入口の和平島にサン・サルバドル城を、またその3年後には淡水にサン・ドミンゴ城をそれぞれ築城している。スペイン・ハブスブルク王朝からの独立を求めるオランダは、16世紀後半からヨーロッパにおいてスペインに対する反抗を繰り返してきたが、東南アジアや中国周辺海域においてもスペインとの対立構造は維持された。そして、オランダ東インド会社は、交易と戦争の両面でスペインに対する挑戦を繰り返すこととなる。オランダは、ゼーランディア砦に勢力を集中させる前から、廈門から延びる東側ルートの交易からスペインを排除しようとし、スペインの拠点マニラを孤立させようとする。しかし、この地域におけるスペインの軍勢力が予想以上に強力であったことや、交易のためにメキシコからの銀塊を必要とした中国人交易商の非協力もあって、オランダの目的は達せられなかった。一方スペインも、マニラのあるルソン島から勢力を拡大しようと試みるものの、香辛料貿易で莫大な利益が期待されるモルッカ諸島への進出は阻止されている。オランダによるスペイン勢力の駆逐は、1642年の台湾北部での事例以外は成功したとはいえないが、既に1580年から60年間にわたってスペイン・ハブスブルク家によって本土が併合されていたポルトガルに対しては、オランダ東インド会社による排除作戦は成功裏に進んだと言えよう。ポルトガルは、モルッカ諸島から追い落とされた後、1639年には日本との交易関係もオランダによって断たれ、さらに2年後にはポルトガルの東南アジアにおける拠点であったマラッカもオランダに奪われることとなる¹⁴⁾。拠点を失ったポルトガルは、その後東南アジアの主要プレイヤーの地位から退き、マラッカ海峡の支配を確立させたオランダがこの地域の鍵を握る存在として登壇することになる。オランダの交易活動は、後にイギリスが得意とする三角貿易を想起させるものでもあったが、バタヴィア、モルッカ諸島、後に鄭成功に排除されるまでの台湾の他に植民地としての領土を持たなかったオランダは、アジア地

¹³⁾ Blussé, 'No Boats to China.', pp. 59-61.

¹⁴⁾ 今日マラッカでは、ポルトガル統治時代のセントポール教会やサンティアゴ砦と並んで、オランダ統治期の名残であるオランダ広場、旧総督邸スタダイス（現マラッカ歴史博物館）が観光地として知られる。

域における政治的影響力を欠く傾向はあった。その点では、インドのような広大な地域を支配下においたイギリス東インド会社との違いは大きい。オランダ東インド会社が享受した特権とは、その地域の支配者から提供された海上交易促進のための権益であり、ヨーロッパから持ちこまれた莫大な金塊の支えはあったが、交易はほぼ地産の伝統的産物の交換で成り立っていた。しかし、オランダが政治的支配をある程度実現させていたバタヴィアや台湾でさえ、実際の交易の多くは福建からの中国船が行い、オランダが貿易全体を支配する可能性は低かったと言えよう。オランダにとっては、自身の交易に不可欠な福建出身の海上交易商達とどのような関係を維持するかという問題が常に脳裏にあった¹⁵⁾。

現在の台南市安平区（安平 Anping は清朝期に福建省泉州市の安平橋に因んで移民によって名づけられた）にゼーランディア砦を築いたオランダであったが、植民の実態はオランダ人と中国人によるハイブリッド植民であった。co-colonialism の言葉が当てはまるような植民地形態であり、オランダ東インド会社単独ですべてを賄うような、また本国から植民のために自国人を連れてきての植民地政策ではなかった。オランダの台湾西南部支配のためには、福建からの多くの中国人の植民が必要不可欠であったからである。現在は陸続きとなり台南市の一部となっているが、当時ゼーランディア砦は「台湾」の語源であると言われる大湾（タイオワン Tayouan、大員とも記される）に突き出た半島砂嘴上に建てられ、半島の対岸にはプロヴィンシア城（Fort Provintia。紅毛城とも呼ばれ、今日の赤嵌楼 Chihkan Tower）が築かれて、湾



今日の赤嵌楼

¹⁵⁾ Ibid., pp. 61-3.

を挟んで兩岸にオランダの植民地域が形成されていった。特に1625年頃から始まったプロヴィンシア地域の地域整備計画は、その後内陸部居住の先住民や中国人（密輸商人や海賊を含む）との交易の基盤を築き上げた。福建からの商人は、既に16世紀末から磁器、塩、鉄を台湾に持ちこんで鹿製品と交換しており、台湾原住民の鹿製品は一番の人気産品であった。鹿の皮革は日本で、鹿肉や薬用としての角や生殖器は中国において高値で取引された。実は、オランダ東インド会社が台湾に到着する前から、日本や中国の交易商達は台湾原住民と鹿製品のバーター貿易を行っていた。オランダの台湾侵入後も、鹿肉の交易は中国船（ジャンク）だけで行われ、オランダは彼等から通行税を徴収するのみであった。それでも、台湾鹿皮は東インド会社のほぼ独占状態にあり、彼等にとっての一番の収益源であった。一方、同会社が独占の確保のために一番手を焼いた事例としては、中国人交易商や獵師による密輸行為が挙げられる。彼等は、嘉義と台中の中間辺りにある麻豆 (Mattau) の北に位置する虎尾 (Favorolang、現在の Huwei) を中心に活動していた。

ところで、日本への鹿皮輸出は、1609年に開設されオランダの東アジア交易の拠点となった平戸オランダ商館を通じてなされていた¹⁶⁾。後述するタイオワン事件で日蘭間には1628年以降5年間交易がなかったが、その後大規模な倉庫が平戸に建設され交易の拡大を予感させたが、徳川幕府の鎖国政策により交易は途絶え、商館も長崎に移転されている。日本に送られる鹿皮の中には、資源枯渇の恐れのある台湾産だけでなく、タイやルソン島から台湾経由で送られるものもあった。実は、鹿皮は15世紀末以降、スペイン、ポルトガル、中国、日本の交易商によってマニラから輸入されており、当時ルソン島は日本市場向け鹿皮の集積地であった。しかし、17世紀にカトリック諸国との友好関係が途絶えると、マニラに代わって台湾が日本向け鹿皮の提供元となる¹⁷⁾。一方、鹿を中心とした「商品経済」の興隆は、台湾原住民の農業離れを加速する側面もあった。また、中国人交易者は必要に迫られ現住民の言葉を、また原住民は中国語を話す状況が一般化していく。このような情景は、スペイン人やオランダ人が台湾に足を踏み入れる以前から見られ、中国人交易者の影響力が既に大きくなりつつあることを示唆しており、さらにオランダによるハイブリッド植民は必然であったことを物語る。福建地方が旱魃で苦しんだ時に、鄭成功の父で元海賊から福建の武装海商グループの指導者となった鄭芝龍は、何万人もの旱魃被害者を台湾へ移住させることを提案し、当地で開拓事業を進めようとする¹⁸⁾。

¹⁶⁾ 平戸オランダ商館については、永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』全4巻、岩波書店、1969-70年を参照。

¹⁷⁾ Hui-Wen Koo, 'Deer Hunting and Preserving the Commons in Dutch Colonial Taiwan', *Journal of Interdisciplinary History*, XLII: 2 (Autumn, 2011), 185-203; Ryuto Shimada, 'Siamese Products in the Japanese Market during the Seventeenth and Eighteenth Centuries' in Yoko Nagazumi, ed., *Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia* (Tokyo, 2010), pp. 152-3.

¹⁸⁾ 海商は単なる商人ではなく、武装して海賊にもなりえた。海に特化したわけではなく、各地域の交易活動全般に関与していた。奈良修一『鄭成功 南海を支配した一族』山川出版社、2頁。

鄭芝龍は平戸藩士の娘田川マツと結婚後台湾に渡り、台湾媽祖廟総本山北港朝天宮で有名な中部の町北港付近に本拠地を構える。彼は海賊の首領となると、中国商船を襲って捕獲品を外国の貿易船に売り込み、外国船貨物を買ってこれを日本に回送しては巨万の富を作っていた。福建周辺の海上は正に戦国時代の様相を呈しており、福建・広東沿岸住民も海賊の略奪に苦しんだため、明の朝廷も、毒を以って毒を制する非常手段に訴え、海賊の一方の首領と仰がれる鄭芝龍に官職を与え懐柔策を採る¹⁹⁾。即ち鄭芝龍は、明の亡命政権である南明によって厚遇され南安伯に任じられて、福建地方支配のお墨付きを得たのである。鄭芝龍の早魃被害者移住の提案をオランダが認めたかどうかはわからないが、このようなエピソードがあること自体、台湾への植民がオランダ東インド会社の単独自力で進められたのではなく、中国（福建）からの移民が台湾植民の重要な要素であったことを物語っている。しかし、植民地政策には武力による移住者の保護は必要不可欠であり、ハイブリッド植民によってオランダは移住者への保護を提供し、中国は交易や農業生産に携わる人的資源を提供することになる。その後南明は清に制圧され、鄭芝龍も清に降伏している。投降する鄭芝龍に従って多くの帰順者が出ることを期待した清は、鄭芝龍を同安侯に封じたが、1661年冬に息子達とともに彼を北京で処刑している。鄭芝龍は、それまでの海商が官僚の庇護を受けながら一党を率いて交易をしていたのに対し、南安伯の爵位を得て自らが高位の官僚となって活躍した点が異質であり特徴的である²⁰⁾。

台湾に足場を築き始めたオランダは、まもなく赤嵌楼を中心とした地域であるサッカム（Saccam、赤嵌）に、食糧生産のため基地を造るが、しばしば原住民の襲撃に晒される。1629年には台南の北、嘉南平原の中央に位置する麻豆の原住民の攻撃を受け、家屋が破壊され家畜も殺されたことから、東インド会社は赤嵌にも兵を駐屯させている。この頃オランダが赤嵌の中国人移民に試験的に作らせたのが砂糖キビであり、中国本土で生産されるものより上質であったため、オランダにとってその後の台湾からの重要な輸出品目となった。その後も原住民の攻撃は続き、1634年にオランダの台湾統治の最高決議機関である台湾評議会（Council of Formosa）は、中国人が妨害を受けずに交易に携われるように許可証を発行し、原住民がなおも中国人移民を苦しめる場合には重大な結果を招くとの一項を設けている²¹⁾。当初オランダは、原住民に対し海賊等オランダの権益に反する行為を行う中国人を引き渡すように要求していたが、1630年代半ばになると、原住民に対して中国人の安全を保障するように命じている。1635年12月18日に麻豆の原住民と東インド会社の間で結ばれた協定が代表的であるが、そこには奥地で鹿皮を購入した中国人に危害を加えることなく安全に原住民の領地を通過させること等

¹⁹⁾ 久保栄「鄭芝龍と鄭成功一國姓爺合戦の史実―」『築地小劇場』第5巻、第5号、3頁。

²⁰⁾ 奈良修一『鄭成功 南海を支配した一族』27-30頁。

²¹⁾ 『熱蘭遮城日誌』第1冊、189頁。ここでの原住民とは麻豆人あるいはサウラン人（Soulang、蕭壠人）を指す。後者は台南や高雄近辺に居住する平埔族であるシラヤ族である。蕭壠は現在の台南市佳里区。

が定められている。多くの台湾人を改宗に導いたオランダ改革派宣教師ロベルタス・ユニウス（Robertus Junius）も、中国人の安全確保の重要性を強調している。中国人保護に関するこのような 180 度の方向転換は、オランダの植民地政策の利益確保にとって必要であり、そのことは中国人植民者の数を増大させたのみならず、台湾における東インド会社の権威の増進に大きく寄与した。台湾南西部においてパックス・ホランディカ（*pax hollandica*）を確立させたオランダは、原住民が支配してきた平原を中国人が耕作する田畑に作り変えたのである。このような中国人重用の指令は、東インド会社の本拠地であるバタヴィアから来ていることは言うまでもない。バタヴィアに本拠を築いた東インド会社総督ヤン・ピーテルズゾーン・クーン（Jan Pieterszoon Coen）は、オランダの台湾行政長官ハンス・プットマンズ（Hans Putmans）に対して、バタヴィア同様タイオワンにおいても中国人口増加に向けて舵を切るよう指示している²²⁾。明朝期及び清朝初期の海禁政策の影響で安全に関する中国側の後ろ盾のない中で、主に福建、広東からの中国人の台湾移住は、オランダのこのような「支援」によって具現化されたのである。

厳格なカルヴァン主義的思想背景を持つクーンは、アンボイナ事件に見られるように対外的には強硬姿勢で臨み、台湾においてもオランダ行政長官を通じて強固な植民地支配を確立しようとする。1628 年のタイオワン事件（浜田弥兵衛事件）も、そのようなオランダの強硬姿勢に起因する事件である。朱印船による交易を行っていた日本の船は、冊封国としか交易を認めなかった明の港に入港することはできず、アユタヤやベトナム、そして台湾での中継ぎ貿易に頼っていたのであるが、日中交易の中継から得られる利益を享受していたオランダは、中国人と日本人の貿易を締め出すためタイオワンに寄港する外国船に 10% の関税をかけ始める。中国人商人は関税の支払いを受け入れたのであるが、長崎代官末次平蔵配下の浜田弥兵衛等の日本人商人は、オランダ人より古くから当地で交易に従事していることを理由に支払いを拒否したため、台湾行政長官がプットマンズの前任者ピーテル・ヌイツ（Pieter Nuyts）の時代に、いわゆるタイオワン事件（浜田弥兵衛事件）が勃発する²³⁾。また、1629 年に起きた麻豆溪事件は、原住民による反オランダ抗争事件であった。原住民のオランダに対する抵抗運動はしばらく続き、

²²⁾ Tonio Andrade, 'Pirates, Pelts, and Promises: The Sino-Dutch Colony of Seventeenth-Century Taiwan and the Aboriginal Village of Favorolang', *The Journal of Asian Studies*, 64, no. 2 (May 2005), pp. 298-301.

²³⁾ 事件の詳細は、永積洋子『朱印船』吉川弘文館、2001 年及び永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』第 1 輯を参照。1628 年 5 月に末次平蔵が派遣し浜田弥兵衛を船長とする 2 隻の船がタイオワンに入港すると、ヌイツは弥兵衛達を拘留し日本へ帰国する出港許可の発行も拒絶する。怒った弥兵衛達はヌイツに飛びかかって彼を縛り、抵抗するオランダ人 2 人を殺害している。この事件の余波で平戸のオランダ商館が閉鎖され、日蘭関係は悪化の一途をたどるかに見えたが、1630 年の対蘭強硬派末次平蔵の死によって、両国関係は好転の兆しを見せている。現在、台南市のゼーランディア城跡にある安平古堡史蹟公園には「安平古堡」と彫られた石碑があるが、この碑は第 2 次世界大戦以前においては浜田弥兵衛の武勇を称える碑であった。

タイオワン事件の処理や鄭芝龍指揮下の明の水軍との海戦、中国の海盜劉香のゼーランディア城襲撃等が影響して、オランダが麻豆溪の原住民を制圧するのはヌイツの後継者ブットマンスが行政長官になってからである²⁴⁾。一旦は表向きオランダに服従することになった原住民であったが、オランダに対する敵愾心は抱き続けていた。オランダが対応に苦慮したのは原住民だけでなく、中国人の中でも海賊グループへの対応では苦しい戦いの連続であった。このように見ると、オランダが植民地統治をしていたのは、その後スペインを駆逐する台湾北岸の和平島や淡水を除けば、現在の台南市とその周辺地域（最北は虎尾近辺）のみであったことが分かる。支配地域の原住民も条約等で一時は服従を誓っても、面従腹背の態度を維持していたようである。サッカムを中心としたオランダ支配地域の4つの原住民族と言え、平埔族の一支族であるシラヤ族（西拉雅本族）のシンカン（新港、Sinkan）、サウラン（蕭壠、Soulang）マタウ（麻豆、Mattau）、そしてバカラウワン（目加溜湾、Bccluan）であるが、その中でシンカンとマタウは互いに対立関係にあり、バカラウワンはマタウと同盟を結び、サウランは窮屈な中立を守っていた。この中でシンカンは数が最も少ない原住民族であったが、オランダ東インド会社とは最も親しい間柄にあった。一方、4つの村の中で最強を誇ったマタウはオランダに反抗し、しばしばオランダと小競り合いを演じている。その1つの背景には、マタウが敵視するシンカンとオランダが親密な関係を維持していたことが挙げられるが、さらにマタウがオランダの交易の障害となる中国人海賊をかくまっていたことも、オランダとマタウの抗争の原因と見られる²⁵⁾。

中国人の植民が増大するに従って、東インド会社は収益を上げていった。まず、同会社が台湾で物品を購入し、それらを外国で販売することから上がる収入が挙げられる。特に鹿皮と砂糖から上がる収益は大きかった。砂糖価格が高騰した時には、台湾砂糖はアムステルダムでも販売されている。もう一つの収入源は、同会社が1630年代から徐々に徴収し始めた各種税金である。最も重要な課税対象は、米の収穫に対する10%の課税であり、さらに計量や家畜の屠殺、鹿肉の輸出にも課税がなされた。これらの税の徴収権も毎年競売にかけられ、普通中国人がその権利を獲得していた。第3に、そしてこれが最も重要なのであるが、同会社が中国人植

²⁴⁾ 1633年10月、オランダと組んだ劉香は鄭芝龍との戦いに敗れる（料羅湾の戦い）。1634年春頃には態勢を立て直し澎湖島に移動した劉香は、再度オランダとともに鄭芝龍と戦う提案を行うが、目下明と交渉中であることを理由にオランダが拒否したことや、船舶修理のために船隊のタイオワン寄港を劉香が要請したことに対しオランダが受け入れなかった事等が原因となっており、1634年4月に劉香はゼーランディア城襲撃を行っている。結局劉香は、明に劉香討伐を命じられた鄭芝龍によって滅ぼされ自殺に追い込まれる。劉香の敗北によって福建海域における覇者は鄭芝龍1人だけとなる。オランダは、武力で南明との貿易問題を解決する道を放棄し、鄭芝龍と協力して安定した交易を確保する道を選ぶ。林田芳雄『蘭領台湾史—オランダ治下38年の実情』汲古書院、2010年、31・5頁；村上直次郎訳注『バタヴィア城日誌1』平凡社、188・9、209頁。バタヴィア城日誌では、劉香はヤングラウと称されている。

²⁵⁾ Tonio Andrade, *How Taiwan Became Chinese: Dutch, Spanish, and Han Colonization in the Seventeenth Century* (New York, 2009), pp. 64・5.

民者に販売した一連の免許である。鹿の狩猟免許は代表的なものであるが、その他にも漁業許可書、居住許可、原住民村落との独占交易権等が売買された。そして競売においては、中国人事業者はこれらの免許や権利を高値で競り落とし、東インド会社の収益アップに貢献したのである。同会社の収支を見ると、台湾原住民やオランダ人植民者から上がる収益は殆どなく、中国人仲介業者からのものが大部分を占めていた。『ゼーランディア城日誌』には、中国人のみが、台湾で蜂蜜を作る蜜蜂であると記されている²⁶⁾。既に言及したように、このような事実は、オランダの中国人移民者に対する対応を根本的に変更させる契機となった。即ち、当初オランダは台湾原住民に対して中国人の活動を制限するために協力することを要請していたのに、1635年以降は、原住民が中国人の安全を保障するようにと規定している。このため中国人植民者にとっては、ボックス・ホランディカを十分に享受する機会が与えられたことになる。これまでのように原住民から直接鹿製品を購入する代わりに、オランダ東インド会社の免許を購入すれば、自分達で狩猟を行うことができ、より少ない費用で獣皮を集めることができた。オランダの保護があることで、本来ならば危険を伴う原住民の狩猟地域での狩猟が可能になったからである。しかし、中国人移住者の中でも、オランダとの良好な関係を反故にする者達が混乱を助長するようになる。彼等は密輸や海賊行為を行う中国人で、麻豆の北に位置する虎尾を拠点とする原住民の交易パートナー達と結託して、オランダの交易独占を脅かしていた。オランダは、しばらくの間麻豆以北への中国人の移住を禁止し、密輸組織を壊滅させた後、虎尾を中国人交易に開放する²⁷⁾。

3. 台湾北部での西蘭戦争

オランダの台湾支配は南部から徐々に中部へと広がっていくのであるが、その支配が北部にまで及ばなかった一因は、北部に 1626 年以降進出したスペインの存在があった。今日の基隆港の入口にある和平島（日本統治時代の社寮島）、そして台北の北に位置する淡水に軍隊を駐留させ、北部沿岸地方をその勢力圏に置いたのである。既に前世紀の 1564 年にスペインは、バスク人ミゲル・ロペス・デ・レガスピ（Miguel López de Legazpi）や聖アウグスチノ修道会士で航海士でもあったアンドレス・デ・ウルダネータを、ヌエバ・エスパーニャからフィリピンに派遣し、フィリピンの島々をその勢力下に置こうとする。彼等はセブ島に入植し、そして 1571 年にはマニラを恒久的な入植地としている。フィリピン征服の目的は、当然のことながら香料諸島との交易であった。フィリピンを東アジアの本拠とするスペイン人にとって台湾との最初

²⁶⁾ 「他認為中國人是：福爾摩沙島上唯一提供蜂蜜的蜜蜂」『熱蘭遮城日誌』第 3 冊、102 頁。

²⁷⁾ Andrade, 'The Rise and Fall of Dutch Taiwan, 1624-1662', pp. 440-4.

の出会い、1582年にスペイン人イエズス会士が難破によって高雄の南沖合に位置する小琉球（Liqueo Pequeno）に打ち上げられた時であった。その後、スペインが本格的に台湾に関与し始めるのはその44年後である。即ち、1626年にマニラに拠点置くスペイン総督代理のフェルナンド・デ・シルバ（Fernando de Silva）は、台湾に兵を派遣することを決定する。気候や様々な面でスペインが統治するルソン島北部にも似た台湾は、ルソン島の事例のように植民によって経済的利益が得られると考えられたし、カトリック宣教の上でも、台湾を起点にすれば中国や日本への伝道に有利とされた。さらに、もし日本の台湾進出が活発化するとマニラへの日本の侵攻の可能性も否定できなかったし、それよりも台湾南部タイオワンに拠点を構えたオランダの脅威はさらに現実的なものとなっていた頃である。即ち、オランダの台湾における本拠地タイオワンは、中国からマニラに向かう中国船を襲うのに最適な位置にあり、それどころかオランダによるマニラ襲撃の可能性すら想起された。既に16世紀末には、エルナンド・デ・ロス・リオス・コロネル（Hernando de los Ríos Coronel）によって、台湾での港湾設置が必要であるとスペイン国王に提言が出され、彼はその候補地として基隆を挙げている²⁸⁾。オランダのタイオワン及び澎湖諸島統治の実態については、1626年4月にマカオ出身のメスティーゾであったサルバドル・ディアスによってスペインに伝えられていた。ディアスはマニラに向かう船上でオランダ人に捕えられ、澎湖諸島と台湾島に2年ずつ拘留される中で、通訳としても働き、当地でのオランダ人、中国人、日本人の活動の状況に精通する。その後数人の中国人とともに台湾から逃亡したディアスはマカオに赴き、当時同君連合でスペインの支配下にあったマカオの初代総督フランシスコ・マスカレナス（Francisco Mascarenhas）の保護のもと、台湾で見聞きしたことを証言し、それが文書に残されている。また、ディアスの供述に基づいてペドロ・デ・ベラによるタイオワンの地図が作られており、それを見るとゼーランディア城から湾の入り口を挟んで北にオランダ商館があり、さらにその北には日本人居住区と原住民である蕭壠人の地域、湾の東のプロヴィンシア城の南には中国人漁民及び盗賊が住む地区があり、湾の南には鹿の狩猟地が広がっている²⁹⁾。台湾のオランダ人に関するおおよその情報を得たスペインは、シルバが信頼を寄せるアントニオ・バルデス（Antonio Carreño de Valdés）指揮下のスペイン遠征軍を編成する。マニラ湾に面したカビテを出港した遠征軍には、バルトロメ・マルティネス（Bartolomé Martínez）神父を筆頭に6名のドミニコ会士が乗り込んでいた。遠征軍は台湾島に近づくと東岸に沿って北上し、台湾北東端の岬である今日の三貂角に至り、そこをサンティアゴと命名する。しかしこの地は防衛の難しい地形であったため、遠征軍

²⁸⁾ Andrade, *How Taiwan Became Chinese*, pp. 81-3; José Eugenio Borao Mateo et al., eds., *Spaniards in Taiwan* (Taipei, 2014 revised ed.) vol. 1 (1582-1641), pp. 34-8.

²⁹⁾ Ibid., pp. 62-70.

はそこからさらに北西に船を進め今日の基隆（鶏籠）港を発見し、その地をサンティッシマ・トリニダード（Santissima Trinidad）と命名すると、港の入り口の島（今日の和平島）に要塞サン・サルバドル城を築造する。

その2年後には、スペインは基隆から北海岸を西に行った淡水をも占拠し、そこにサント・ドミンゴ砦を築く。北海岸を制圧した勢いもあってか、1627年12月、マニラとヌエバ・エスパニーヤのアカブルコ間を行き来したガレオン貿易の主役マニラ・ガレオン船のサンフランシスコ号船長フアン・デ・セビコス（Juan de Cevicos）は、台湾からオランダ勢力を即時駆逐すべきであると提言している。即ち彼は、フィリピンとマカオの戦力を統合して、オランダに対抗する必要性を論じている。マカオにとっては、重要な日本との交易ルートに立ちはだかるオランダの台湾拠点には常に脅威であり、さらにはオランダが1622年に試みたように、台湾の拠点から距離的に近いマカオを攻略する可能性を排除するために、このような駆逐作戦が必要であるとフアン・デ・セビコスは主張する³⁰⁾。このようなスペインの北部沿岸占拠の動きに対してオランダは危機感を覚えたが、上記タイオワン事件や郭芝龍との対決もあって、すぐには軍事的対応を試みる余力はなかった。一方、スペインの北部沿岸上陸時に、当初から敵対的であった原住民との融和を実現させたのは、遠征軍に同行したドミニコ会士であり、その後16年にわたるスペインの北部沿岸支配期に、宣教を通してスペインによる統治を側面から支えたのも彼等であった。このような宣教に関する記録の1つに台湾での最初の洗礼者の話があるが、それによれば、日本人キリスト者と現地の女性との間に生まれた2人の娘に最初の洗礼が施された。洗礼式はなるべく盛大に行おうとの方針で進められ、アントニオ・バルデスが代父となっている。この日本人は原住民とスペイン人の間に立って色々と協力したようである。ドミニコ会士の原住民に寄り添う姿勢は、原住民のスペインに対する信頼を獲得する上で大きく貢献している。このようなドミニコ会や台湾管区長マルティネスの台湾での働きに対しては、マニラに駐留するシルバの信頼を得たのみならず、マニラ大司教のミゲル・ガルシア・セラーノ（Miguel García Serrano）の信任も厚く、大司教はスペイン国王フェリペ4世宛の書簡で、成功裏に進む台湾北岸植民と宣教を考えるとドミニコ会に今後の活動も委ねるのが最善として、ドミニコ会士のさらなる補充を要請している³¹⁾。この時期、マニラを中心としたスペイン植民地世界では、マニラの総督（代理）、大司教、ドミニコ修道会の間で非常に密接な関係が維持されていたことが理解できる。この段階では、後述するマニラにおけるイエズス会の影響はまだ見られない。

ところで、この時期の台湾北部におけるスペインと原住民との交易は、原住民に対するドミ

³⁰⁾ Ibid., pp. 106-11.

³¹⁾ Ibid., pp. 71-3, 79-80, 86.

ニコ会士による宣教活動とともにしばしば話題に上るが、オランダが統治する台湾中南部の交易状況と比べ顕著に見られる相違は、北部においては中国本土からの交易商の実態が見えないことである。即ち後者においては、オランダ人と中国人のハイブリッド植民に基礎をおく、中国人交易商、密輸業者、海賊の活発な活動が指摘できたが、北部においては、バーター取引を中心としたスペイン人と原住民との交流が中心を占めていた。おそらく経済活動のレベルと利益の創出力においての南北格差が存在することで、経済に長けた中国人交易商の注目はおランダ支配地域にあったのではないかと推察できる。台湾に全力を傾けていたスペインの宣教師は、経済発展の必要性も理解しており、オランダのように中国人をこの地に移住させて農業や狩猟に従事させ、彼等に課税することで財政的基盤を確立するよう提案していた。しかし、スペインはそのような移住奨励措置をとらず、逆にオランダが拡大路線を歩んでいる時期に、スペイン遠征軍の半分をマニラに帰還されるという消極策を採り、後述するオランダによる台湾からのスペイン勢力排除を容易にしている。

ところで、史料の面からも、台湾やフィリピンにおけるドミニコ会とイエズス会の活発な活動が指摘できる。上記脚注 12 に記したオランダ側史料の他に、台湾に進出したスペイン人の行動を知る手立てとして、次のスペイン側史料が参考になるが、その中でドミニコ会の活動は特記に値する。スペインのアビラにあるサント・トマス修道院とマニラのサント・トマス大学にはドミニコ会の記録 *Archivo de la Provincia del Santo Rosario* が保存されているが、この文書では特に台湾北部の原住民の生活に関する情報が豊富である。これによって、台湾北部居住の原住民とドミニコ会の頻繁な交流が想像できる。台湾北部のスペイン統治に大きな役割を演じたドミニコ会の記録故に、その情報の持つ意義は大きい。次にセビリアのインディアス総合古文書館 (*Archivo General de Indias*) が保管する古文書は、スペインが植民地として統治した新大陸 (ヌエバ・エスパーニャ) に関する豊富な史料を持つことで有名であるが、フィリピンはヌエバ・エスパーニャ副王領の一部と見なされ、また台湾もフィリピンの植民地行政と切り離されることなく一括して扱われていたため、この古文書館に台湾関連の多くの史料が存在する。さらに重要なのが、マニラのフィリピン国立文書館保管の史料とマドリードのスペイン王立歴史アカデミーで管理されているイエズス会関連史料である³²⁾。スペインの台湾支配に関してドミニコ会とイエズス会の確執があったことは後にも触れるが、この2つの修道会の関連史料は、両修道会の台湾及びその周辺地域での活動の実態を解明するのに大いに役立つ。

一方オランダであるが、1633 年 10 月、海盜劉香と組んで戦った「料羅湾の戦い」で鄭芝龍に敗れたように、海盜の暗躍する福建海域を含め台湾周辺での支配権確立も順調ではなかった。

³²⁾ Ibid., pp. xv-xvii.

しかし、オランダは鄭芝龍と和解協力して、中国との交易を安定化させる政策に方向転換する。その為にも台湾南部における支配の確立は重要であった。その一環としてオランダが行ったのが、「料羅湾の戦い」敗戦直後のラメイ島（17世紀末以降は中国人によって小琉球嶼と呼ばれる。小琉球は、元々琉球と区別して台湾本島を指す言葉であった。）侵攻である。ラメイ島は、今日高雄の東港から30分程で行けるリゾート地となっているが、当時1000人以上の原住民族が瘦せた土地で暮していた。そこにオランダの一方的理由によって、原住民に対する殺戮が繰り返され原住民が島からほぼ消滅した事件が起こっている。オランダの台湾評議会がラメイ島の武力侵攻を決定したのは1633年11月である。『ゼーランディア城日誌』には、この攻撃は、ラメイ島民が以前オランダ船ガウデン・レーウ号の乗組員を謀殺したことに対する報復措置であると記されている。ガウデン・レーウ号をめぐる事件の詳細は明らかでないが、報復措置としてはオランダの討伐は必要以上に執拗であった。オランダは、当時ラメイ島をガウデン・レーウ島と呼んでいたが、『バタヴィア城日誌』によると、1633年11月に始まった第1次侵攻では、「島の小屋、畑および少量の糧食を焼き、また破壊したるに過ぎず。島には一人も留まれる者なく、我が兵の来たりし時、直ちに逃れ穴に隠れたり。」と報告されている。このように、島に対する第1次侵攻は予期した成果をあげられなかったと考えられる。次いで1636年4月に始まる第2次侵攻であるが、台湾行政長官及び評議会は島の完全征服を行うことを決議する。島への攻撃が始まると、島民は幾度か和平交渉を申し入れたが、無条件降伏を要求するオランダに拒否され、その後オランダによる無差別殺戮が行われたようである。オランダはラメイ島に柵を設け、兵士を駐留させて残留島民の捕捉を続けると同時に、中国人や台湾島の原住民の侵入を防ぐ措置を講じる。同年7月には、オランダ兵士が島民に殺害された事件をきっかけに、オランダは第3次攻撃に踏み切る。オランダ兵士の他にシンカン、サウラン、マタウ等の原住民協力隊員も加わって島民に対して殺戮、投降の呼びかけがなされた。原住島民の掃討作戦にこれら他の原住民が協力する様は、日本統治期に勃発した霧社事件で日本軍に協力して掃討に加わった原住民を想起させる。連行された島民の大部分も後日死亡しており、ラメイ島民はほぼ全滅に近い状況であったと言えよう。島民のいなくなった島を中国人がオランダから借り受けて農作を始めている。その後第4次侵攻が行われるが、強制連行された島民の多くは奴隷として重労働を科せられた事例が多い。劉香の攻撃以降防備の脆弱さが露呈されたゼーランディア城の強化工事にも、彼等が駆り出された記録もある³³⁾。

1641年の夏になって、オランダはようやく台湾北部からのスペイン勢力の駆逐に本腰を入れる。その前年にオランダの台湾行政長官に着任したパウルス・トラウデニウス（Paulus

³³⁾ 村上直次郎訳注、中村孝志校注『バタヴィア城日誌1』161頁；林田芳雄『蘭領台湾史』151-88頁。

Traudenius) は、ヨハン・ファン・リング (Johan van Linga) 指揮の艦隊出港日の 8 月 24 日に、サンティッシマ・トリニダードの指揮官ゴンサロ・ポルティーリョ (Gonzalo Portillo) 宛に城の明け渡しを要求する書簡を送付し投降を呼びかけるが、ポルティーリョは 9 月に入りそれを断固拒否する。その後のオランダによるスペイン支配下の台湾北岸への第 1 次攻撃については、2 つの全く違った解釈・描写が存在する。1641 年オランダは、スペイン占有地を武力攻略する十分な兵力を持っていたにもかかわらず、北部沿岸地帯を偵察しただけでゼーランディアに帰ったとの説と、オランダ遠征軍はスペイン要塞を攻撃したが、スペインの激しい反撃にあってゼーランディア城に引き返すことを余儀なくされたとの相反する説である。実際に起こったことは、オランダのヨハン・ファン・リング (Johan van Linga) 指揮の艦隊は、基隆海域に到着すると、付近を偵察してから基隆の北西に位置するキンパウリ (金包里) を焼き払ったが、当初の命令に従ってサンティッシマ・トリニダードに攻撃を仕掛けることはなかった。南側に砦を築き湾へのアクセスを遮断すれば、糧食の不足でスペイン軍が投降するとの意見も出たが、リングは包囲戦には兵員、砲、物資の全てが不足していると判断する³⁴⁾。翌 42 年になると、オランダは台湾北岸からスペイン勢力を一掃するため、パタヴィアからの援軍を要請しつつ、トラウデニウス長官はおよそ 700 名の部隊をタイオワンから台湾島西岸に沿って北上させ、2 回目の攻撃を開始させる。オランダ遠征軍は、淡水を通り過ぎて基隆に着くとサン・サルバドル城のある社寮島に上陸。まもなく基隆はオランダ軍の手に落ち、スペイン守備隊は全員ドミニコ会の僧院に撤収する。淡水のスペイン守備隊は既に基隆に合流していたので、これによって台湾北岸のスペイン支配には終止符が打たれたことになる³⁵⁾。

16 世紀以降、スペインとオランダはネーデルラントにおいて、また世界各地において熾烈な戦いを繰り返してきたのであるが、上記のようにスペイン軍は台湾においては比較的簡単にオランダの軍門に降っている。その最大の理由の一つとしては、各種資源の制約もあって、スペインはフィリピン・ミンダナオ島のモロ (ムスリム) との戦いに戦力を集結させる必要があったことが考えられる。1565 年以降ルソン島北中部の海岸線の支配を確立させたスペインであったが、ルソン島山岳部とミンダナオ島のモロに対する制圧はかなわなかった。オランダが台湾原住民と交えた戦いと同じように、フィリピンではスペインがモロや山岳民族によるゲリラ戦に苦悩していたことになる。さらにモロは、スペインとの戦いでオランダの支援を得ており、台湾での西蘭戦争は台湾島での単なる地域戦と捉えるのではなく、日本からパタヴィアに至る地域・海域における両国の大きな戦略の文脈の中で考える必要がある。イエズス会士補佐官の助言を受けて、スペインのフィリピン総督コルクエラ (Sebastián Hurtado de Corcuera) は、

³⁴⁾ Borao Mateo et al., eds., *Spaniards in Taiwan*, vol. 1, pp. 325-6.

³⁵⁾ 林田芳雄『蘭領台湾史』130-4 頁。

南のモロの脅威に集中的に対応するため、台湾の守備隊への支援を疎かにしてしまう。このような台湾軽視の判断の背景には、イエズス会とドミニコ会という2つの修道会の間に宣教地においてライバル関係が存在したことを挙げることができる。ドミニコ会は台湾において既に宣教の基盤を築きつつあり、台湾を踏み台として中国大陆での本格的宣教活動の開始を計画していた。カトリック世界や宣教地において宣教、政治の両面において勢力を拡大させてきたイエズス会にとって、ドミニコ会のこの地域における活発な活動は、目障りであったに違いない。この頃にはフィリピンにおける植民地統治の指導者と親密な関係を確立したイエズス会が、ドミニコ会を利する本格的な台湾支援に賛同するとは考えにくい³⁶⁾。元々、オランダ本国との距離感はあったにせよ、バタヴィアに本拠を置くオランダ東インド会社は、トルデシリャス条約の制約のためにマニラからは太平洋を東に船を進めざるを得なかったスペインと比べるとやや恵まれた状況にあった。フィリピンのスペイン人は、太平洋を渡り、さらにメキシコ（ヌエバ・エスパーニャ）のアカプルコを経由してメキシコ東岸に至り、そこからカリブ海を航行して大西洋を横断してスペインに至る長い行程によって、やっと本国の指示を仰ぐことができた。それには往復で約2年の歳月を要したと言われ、そのため本国の指示が待てないことも多々あり、自然とマニラのフィリピン総督が戦略的判断を下す場面が多くなる³⁷⁾。通信の他に補給の確保においても、スペインのマニラは、交易の拡大が続くオランダ東インド会社の拠点バタヴィアの後塵を拝することになる。

4. 郭懷一、鄭成功と鄭氏政權

1652年の夏、郭懷一（ファイエット、Fayet）と呼ばれる中国人農民を指導者とする5000人規模の反乱が勃発する。これまでも台湾原住民のオランダに対する反乱はしばしば見られたが、中国本土から台湾へ渡ってきた中国人農民の反乱は他に例がない。竹やり等で武装した反乱農民達はサッカムのオランダ東インド会社事務所を襲撃するが、東インド会社兵とシンカン、サウラン、マタウ等の原住民協力者は反乱を鎮圧し、反乱農民約4000人を殺害している。郭懷一やその他の反乱指導者はサッカム近郊の土地所有者であり、これらの土地で働く農民が反乱

³⁶⁾ John Leddy Phelan, *The Hispanization of the Philippines: Spanish Aims and Filipino Responses 1565-1700* (Madison & London, 1967), pp. 136-41. イエズス会は、その他の地域でも他の修道会と宣教に関する論争の中にあった。日本では、イエズス会とフランシスコ会等の托鉢修道会が宣教地に関する意見の相違で対立していた。詳細は、Carla Tronu, 'The Rivalry between the Society of Jesus and the Mendicant Orders in Early Modern Nagasaki', *Journal of International Center for Regional Studies*, no. 12 (2015), p. 32 及び Lino M. Pedot, *La Sacra Congregazione de Propaganda Fide e le Missioni del Giappone (1622-1838)* (Vicenza, 1946) を参照。

³⁷⁾ John Newsome Crossley, *Hernando de los Ríos Coronel and the Spanish Philippines in the Golden Age* (Farnham, Surrey, 2011), p. 21.

に加わった。この頃には大陸の中国人の台湾入植を促進する税の免除や補助はなくなり、収穫に対する 10%の課税は過剰ではなかったが、台湾在住の中国人に対して月々請求される人頭税に対する反発が大きかった。もちろん、オランダ人と中国人のハイブリッド植民に溶け込みそこから利益を得ていた多くの中国人植民者は、郭懷一の反乱からは距離を置き、オランダに忠誠を誓っていた。郭懷一の反乱は失敗に終わったが、反乱軍の中には中国本土で清に対して戦いを続ける鄭成功が、いずれ台湾に攻め入ることを夢見る者もいた³⁸⁾。

1624年に父は鄭芝龍、母は平戸藩士の娘マツの間に平戸で生まれた鄭成功は、7歳で父のいる福建に渡って教育を受け、41年には妻を娶り、後に彼を継ぐ鄭經が生まれている。北伐の軍を興した南明の第2代皇帝隆武帝に気に入られた鄭成功は、忠孝伯に封じられ招討代將軍の印綬を与えられる。初対面で鄭成功を気に入った隆武帝が、「朕に娘がいれば嫁がせるが、いないので残念である。それゆえ国の姓を授けよう」と言って朱姓を授けたことから、鄭成功は「国姓爺」の異名で呼ばれることになったことは有名である。45年に鄭芝龍が清に降伏すると、鄭成功は益々反清の立場を鮮明に掲げる。厦門や金門を根拠地とし、清朝と一進一退の戦いを繰り返すが、その戦費を支えたのが海外との交易であった。そのような交易の基礎となったのが、鄭氏五商と呼ばれた貿易運営組織である。鄭氏から借りた資本で交易を行い、山五商が購入した物資を海五商が海外で販売して、利益を鄭氏に渡すかたちであった。清は鄭成功に降伏を勧める手紙を父鄭芝龍に書かせるが、鄭成功は58年に北伐を決行する。しかし、南京で惨敗を喫し福建に戻った鄭成功は、厦門の本拠地だけでは清との対決が難しいと考え、議論の末に台湾進攻が決まりオランダと戦火を交えることとなった³⁹⁾。

オランダの最後の台湾行政長官となるスウェーデン出身のフレデリック・コイエット (Frederick Coyett) は、かなり前から鄭成功の台湾攻略の可能性を訴えていたが、バタヴィアの総督はそれを無視し、タイオワンのゼーランディア城及びプロヴィンシア城には十分な防衛態勢が確保されていなかった。この間の経緯を、コイエットは後に「閑却されたるフォルモサ」の中で語っている。彼によれば、鄭成功の台湾侵攻についてはバタヴィアに定期的に警鐘を鳴らしてきたが、東インド会社内のコイエットのライバル達が、コイエットの警鐘は空想であって彼の臆病さから出たものであると会社上層部に吹聴した結果、何の防衛措置も講じられなかった。郭懷一の反乱直後の1653年に造られたプロヴィンシア城も、あまりに脆弱な建造で、小規模な反乱程度には対応できても、包囲戦やカノン砲による攻撃には到底耐えられないとコイエットは結論付けている⁴⁰⁾。その後のプロヴィンシア城陥落の状況を見ると、コイ

³⁸⁾ Andrade, 'The Rise and Fall of Dutch Taiwan, 1624-1662', pp. 445-6.

³⁹⁾ 奈良修一『鄭成功 南海を支配した一族』31-46頁。

⁴⁰⁾ フレデリック・コイエット、生田滋訳「閑却されたるフォルモサ」『オランダ東インド会社と東南アジア』岩波書店、1988年；'Taiwan in Time: The Swede who lost Formosa', *Taipei Times*, Jan. 28, 2018.

エットの指摘通りの戦況の展開となったと言えよう。1660年、バタヴィアからの支援のないままに、コイエットは可能な範囲で戦いの準備を進め、バタヴィアには援軍の派遣を要請する。バタヴィアの東インド会社総督はヤン・ファン・デル・ラーン（Jan van der Laan）艦隊司令に出港を命じ、彼の艦隊は9月には台湾に到着している。ファン・デル・ラーンは鄭成功の台湾侵攻の可能性については懐疑的で、台湾防御よりマカオを攻撃略奪して今回の派遣費用を賄った方が良くと考え、コイエットや台湾評議会と対立した⁴¹⁾。元々ファン・デル・ラーンがバタヴィア当局から受けた命令が、鄭成功からタイオワンを防御することと、鄭成功のタイオワン攻撃がありそうもない場合には、ポルトガルからマカオを奪い取るべくマカオ侵攻を促す曖昧なものであったことが、ファン・デル・ラーンの不明瞭な行動の背景にあったと思われる。さらに彼が、鄭軍の軍勢力を過小評価していたことも事実である⁴²⁾。台湾攻略の意志はないとの鄭成功の信書を信じて、結局ファン・デル・ラーンは翌61年2月に艦隊を率いて熟練兵とともにバタヴィアに帰ってしまい、タイオワンに残されたオランダ守備隊は、弱小兵力で鄭成功の大軍に対峙せざるを得なかった。

61年4月30日、突如海上に現れた鄭軍船団にオランダ守備隊は驚愕する。『バタヴィア城日誌』はその状況を、「朝九時頃四百より少なからざるジャンク船、ワンカン船およびさらに小なる船、北方より来航せり。右の船は皆兵士を満載し、聞くところによればその名を知られたる中国人ピンクワ（斌官、ピンクワの漢字名は何廷斌）これを率いて官人国姓爺が中国より派遣したるものなり⁴³⁾。しかしてさらに六百艘のジャンク船、後より来たる由伝えられたり。右の艦隊がタイオワンの北の錨地に近づくや、約百艘各百人または二百人の兵士乗り込みて、まず北線尾に上陸せり。」と描写している⁴⁴⁾。鄭成功はまずサッカムに上陸し、先鋒隊がプロヴィンシア城を包囲し、ゼーランディア城との交通を遮断。オランダも陸海で反撃するも圧倒的な兵力差は如何ともし難く、台湾評議会は鄭軍との講和交渉を開始する。評議会のトーマス・ファン・イペーレンと鄭成功との交渉が決裂し戦闘が再び始まると、まずプロヴィンシア城が陥落

⁴¹⁾ William Campbell, *Formosa under the Dutch: Described from Contemporary Records, with Explanatory Notes and a Bibliography of the Island — Primary Source edition* (London, 1903), pp. 407-11.

⁴²⁾ Andrade, *How Taiwan Became Chinese*, pp. 237-8. バタヴィア当局自体は、鄭軍が実際にタイオワンに攻撃を仕掛けた場合、オランダ軍が鄭軍の上陸を阻止する力を持っていないことを認めている。そのような判断の結果、オランダが清朝との協力関係を模索し鄭氏集団の動きを牽制することで鄭成功の脅威に対抗しようとしたかという点、必ずしもそうとは言えない。清とオランダの対話は実際に行われたが、対鄭共同軍事作戦の具体化の話には至っていない。林田芳雄『蘭領台湾史』250-1頁。

⁴³⁾ 在台湾漢人の頭領の1人であったピンクワは、鄭氏の代理人となって漢族商人からの輸出品に課税した問題が発覚（代理課税問題である所謂ピンクワ事件）、ピンクワはあらゆる特権と名誉を剥奪された後厦門に逃亡し、やがて鄭軍の台湾侵攻の指南役となる。『台湾外記』によれば、ピンクワは台湾行政長官コイエットの公金数十万両を横領したので、長官の追及を恐れ、厦門に逃亡し鄭氏側に身を寄せたとある。林田芳雄『蘭領台湾史』251-8頁。

⁴⁴⁾ 村上直次郎訳注、中村孝志校注『バタヴィア城日誌3』224頁。



今も残るゼーランディア城の城壁

し、鄭軍はプロヴィンシア市街を占拠する。プロヴィンシア城と比べ台湾行政長官の居城である難攻なゼーランディア城に対しては、鄭軍は包囲戦を展開する。今日訪れても、赤嵌楼と比べゼーランディア城のあった安平古堡は、砦が高台にあることや堡壘及び城壁等の残蹟を見てもその堅固さは明らかで、鄭軍が難攻を予想して包囲網を敷くに至ったことも理解できる。ゼーランディア城は無傷のままであったが、鄭成功は早くも王国建設に着手し、国号と首都を定め、中央と地方の文武官を発令している。広義の赤嵌（即ち台湾島）を東都と改め、これを国号となし、狭義の赤嵌（即ち旧プロヴィンシア町）を承天府と改称して首都としている⁴⁵⁾。この間オランダ側にも動きがあり、先にバタヴィアに戻っていたファン・デル・ラーンは、バタヴィア総督にコイエットが行政長官として不適格な人物であると報告し、コイエットの後任としてヘルマン・クレンケが任命されている。クレンケは戦闘中の台湾には上陸せず長崎に逃げてしまい、結局行政長官として台湾に赴任することはなかった。バタヴィア総督は6月末になると台湾支援の艦隊派遣を決定し、ファン・デル・ラーンに指揮官を依頼するが固辞され、代わってヤコブ・カーウ（Jacob Caeuw）を艦隊司令に任命し派遣する。8月12日にカーウの艦隊は台湾に到着し、食糧と弾薬を運び込み僅かな兵士を上陸させることに成功する。そしてタイワン市街を砲撃したが戦果は乏しく、結局鄭軍の艦隊に撃退されて、カーウは敵前逃亡のかたちで最良の船と兵士を伴ってバタヴィアに帰ってしまった。62年1月末、鄭軍は三方から砲撃

⁴⁵⁾ 林田芳雄『鄭氏台湾史 — 鄭成功三代の興亡実紀』汲古書院、2003年、161-2頁



鄭成功議和圖：鄭成功に降伏するコイエット

を開始しゼーランディア城の堡壘を破壊する。コイエットは投降し、オランダの 38 年に及ぶ台湾統治に終止符が打たれる。

息子鄭成功に手紙を書き清に対する抵抗を諦めさせることに失敗した鄭芝龍は、ゼーランディア城陥落の 1 年程前に清によって処刑されている⁴⁶⁾。一方オランダ側には、宣教師アントニウス・ハンブルーク (Antonius Hambroek) に関する悲愴な「美談」がある。鄭軍来襲時に自身の宣教担当地区であった麻豆にいたハンブルークは鄭軍に捕えられ、勸降使として鄭成功の書簡をゼーランディア城のコイエットに渡し、返信をもらってくる役割を任じられサッカムを發つ。コイエットは投降を拒否し、ハンブルークは 2 人の娘をゼーランディア城に残し、報告のために死を覚悟して鄭成功の陣に帰っていく。どこまでが真実か詳細は分からないが、後にオランダでは、この史実を題材として劇作 *Antonius Hambroek, or the Siege of Formosa* が 1775 年に発表されている。この劇の中では、ハンブルークがコイエットに対して、自分の身に何があっても構わないから徹底抗戦を呼びかけるとの設定になっている。そして、ハンブルークの 2 人の娘が父にゼーランディア城に残るように懇願するが、妻やその他 3 人の娘等が人質になっているとして、父は 2 人を振り切って城を後にする。記録によると、その後ハンブルークを始め多くのオランダ人が首を斬られ、妻子達は中国に売られていったとのことである。ハ

⁴⁶⁾ 奈良修一『鄭成功 南海を支配した一族』47-60 頁。『バタヴィア城日誌 3』には 1661 年 11 月半ば以降の経緯への言及はないが、その時点までの詳細な記述がある。

ンブルークの娘の1人は鄭成功の妾になっている⁴⁷⁾。この劇作のハンブルークと娘のゼーランディア城での別れの場面は、1810年にヤン・ウィレム・ピーネマンによって、オリエンタリズムを彷彿させるような情景と色彩の絵画に描かれている。絵画の複製は、ゼーランディア城跡に造られた安平古堡史蹟公園の中にある熱蘭遮城博物館に展示されている。

台湾からの撤収が決まった1660年代は、オランダ東インド会社の全盛期であった。オランダ・ポルトガル戦争の結果、1658年にコロンボが陥落してポルトガル領セイロンは正式にオランダに割譲され、コーチンをはじめインドのマラバール海岸のポルトガル領もこの頃オランダの支配地域となっている。さらにオランダは、利益を生む日本や香料諸島での交易をほぼ独占していた。長崎からジャワ島へ、マラッカから喜望峰へと、オランダ船は海の主のように航行していた⁴⁸⁾。それ故に、繁栄しオランダに利益を生み出していた台湾を、総力戦を挑まずして比較的簡単に鄭成功に渡してしまったことは理解に苦しむ。上記のような会社内部の人間関係が災いしたのか、鄭軍の大軍を前に徹底抗戦しないオランダ艦隊司令の中途半端な対応か、あまりに大きな海域、地域に影響を持つオランダ東インド会社の軍事力、補給力が伸び切ってしまい、一地域において鄭軍規模の軍隊との戦いには対応できなかったのか、敗北には様々な要因が考えられ結論は出ない。

バタヴィア到着後コイエットは、3年間拘置された後、台湾を死守できなかったこと、東インド会社にとって重要な経済的権益を失ったとして、反逆罪で裁判にかけられ死刑判決をうける。バタヴィアの当局内には、ファン・デル・ラーンのコイエットに対する低評価を受け入れる勢力があり、彼等はコイエットが東インド会社の利益に相反する行動をとり続けたと判断していた。まず、来襲するかどうか分からない鄭軍を待つよりマカオに進攻した方が会社にとっては利益になったのに、コイエットはファン・デル・ラーンの艦隊がタイオワンに留まることを要求したこと、鄭軍の侵攻に対する準備と称して台湾の華人商人を軟禁したり、華人農民の稲を焼却したりして、これまで会社に大きな利益をもたらしてきた華人社会を苦しめたこと等が指摘されている⁴⁹⁾。その後コイエットは、恩赦を得てバンダ諸島に追放される。ここでコイエットは、先述の「閑却されたるフォルモサ」を執筆している。一方鄭成功は、ゼーランディア城を居城とし、城の名前を安平城、周辺の町を安平鎮と名付けて台湾に君臨したが、台湾攻略後まもなくしてこの世を去る。その後、鄭成功の弟鄭襲との後継争いに勝った鄭成功の息子鄭経は、64年に金門・厦門で清とオランダ連合軍に敗れるも、参謀の陳永華の後ろ盾を得て鄭氏政権を維持する。鄭経は1664年に東都を東寧と改めている。鄭経は大陸において厦門を堅

⁴⁷⁾ Tonio Andrade, *Lost Colony: The Untold Story of China's First Great Victory over the West* (Princeton & Oxford, 2011), pp. 166-70, 178-80.

⁴⁸⁾ C.R. Boxer, *Dutch Merchants and Mariners in Asia 1602-1795* (London, 1988), III, 16-7.

⁴⁹⁾ Andrade, *How Taiwan Became Chinese*, pp. 238-9.

守し、福建、広東、浙江沿岸や福建南部に進攻しようとするが、清は鄭經が大陸を離れ台湾に退くならば台湾を藩として通商を許すと提案する。また、台湾が臣下と称して朝貢すればよいと、鄭經にかなり譲歩した提案を行うが両方とも鄭經によって拒否される。結局、鄭經死後の澎湖海戦に敗れた鄭氏は 1683 年に降伏し、鄭氏による 23 年間の台湾統治も幕を閉じる⁵⁰⁾。

⁵⁰⁾ 奈良修一『鄭成功 南海を支配した一族』63・78 頁；林田芳雄『鄭氏台湾史』163 頁。